

リック・マーゴリーズ

新コミュニティーづくりのために

(I) 歴史に学ぶ

過去一五〇年のあいだ、資本主義社会の中に集権的でない社会主義小社会をつくらうとするところが数多くあった。フランスの労働者自治、一九世紀アメリカコミュニティーそれにイスラエルのキブツの三つの主な運動のうち、あとの二つが、資料の残っていることもあり、ぼくらへの示唆に富んでいる。アメリカコミュニティーは孤立を求めた。そもその最初から、かれらは社会からは離れたものと錯覚していたので、運動の拡大にとりなって、その近視眼的な自己制約が言動にあられるようになった。かれらは好んで仲間

うちに閉じこもった。外部の人間に対して持つ敵意は、隣人たちが交渉を拒否し、ときには表立った攻撃を加えることとなって自分に返ってきた。内部での利己的な充足を追うことの最大の危険は、徐々に強くなる近親相姦的な人間関係のよどみである。コミュニティーは同類の集まりとなり、自己満足し、そのなかで、新しい世界を形成する創造的な情熱を抹消していった。自分たちの小社会に対する偏狭な見方に根ざした安堵感こそが、形成されつつあったアメリカ社会の歴史的力関係からかれらを脱落させたものであった。失敗は、広い意味でのコミュニティーの幸福が外の社会の経済、政治的現実と切り離せないものだというところを見落したところにある。

(II) 実験の必要

コミュニティーの将来への展望と、その実現方法における柔軟性のなさが、壊滅、禁圧につながることは歴史の示すところである。共に生き、働こうとするなら、常に今の現実の状況にもとづいて行動しつつ、理想に向かい成長しなければならぬ。人間の性格や志向によって異なった型のコミュニティーができていくであろう。これは自然であり、それだけが更に成長し、発展すること——内部的には本當の解放に向かう人間の関わり具合の實現、外部的には富裕者の手に握られた権力を人民の手に返すようなコミュニオン連合組織の

形成——を追求する限りよいことである。最終目標は新しい社会的分配の實現であり、新しい人間である。常に心を開き、ドグマチックな、あるいは狂信的な要素は避けなければならぬ。平凡人の間に根つき、誰でもが信頼し、理解してついでこれるような道に沿って成長しなくてはならないからである。

(III) 相互批判と討論

個人と集団の成長は真空の中では行なわれず、ちがった意見や見解の対話の中で實現される。これは、喜んで他人の意見を聞き、喜んで変わり成長することに基礎が置かれなければならない。悲しい教訓ながら、アメリカの社会主義コミュニティーは他に聞かなかつた。ほとんどは内部紛争と派閥争いに、未熟なまま死に果てた。必要なのは常時意志の疎通を可能にする、例えば週一回の例会のような、その目的をもった機会である。しかし、もしも人びとの間に本當の信頼がない場合には、まったく機械的なものになってしまうだろう。

多分アメリカの意図的コミュニティーの中で最も成功した例であるオネイダ共同体は、

「相互批判」(出会い集団、あるいは集団療法の前身)と呼ばれる会合を持っていた。一八七五年にオネイダを訪れた、ジャーナリストのチャールズ・ノルドフは「……(相互批判は)……ノイエス(オネイダの創始者)や彼の後継者たちが、正当にも、オネイダの実際の共同生活の礎石とみなしていたほどによくできた考案であった。それは実質的に主要な自治の方法であった。不適当なものを排除するのに有効であると同時に、内部の一般の機構と秩序に調和する者を訓練教育するのに適当であった」と書いている。

相互批判会は、個人的な相談ことや助言を得たいと望むメルバーが要請するか、あるいは不適当な行いを矯正するために開かれることができた。特筆にたいするものは、相互批判会はなんら権威的なものではなく、そのゆえに助言とみちびきとして理解されていたことだった。批判の対象となる「犠牲者」の側になんらの悪意も喚起されなかつた。個人の知的、精神的進歩がコミュニティー全体の関心であったということが特に注目される。メンバー各人がお互いに、愛と共感の精神にもとづいて高めあうことが、みなに関心事であった。

(IV) 農村と都市の二極

過去の失敗からのもうひとつのなまましい教訓は、農村に孤立し、土と農業に埋没していたコミュニティーが、いかにまったく内に閉じこもり停滞していったかである。ぼくらめざすものは農村での土地と労働とともに、都市での家と仕事をも与えるものでなくてはならない。多分一時間から一・五時間ほどの距離——行くに便利で、無用の外出を制限するほどには遠い——が最適と思われる。

コミュニティー建設を一生つづけることは、まず経済的に自立するみちを考えると同時に、他のことにも活動できる、時間的制約のないことである。ぼくらは当然生活の簡素化、ブルジョア趣味、美食の制限をしなくてはならない。クロボトキンは農業と手工業混成の村を提唱した。ぼくらの思い描く農村コミュニティーのひとつの極である。全面的な農業は時間をとりすぎる。「トラック園芸」(野菜、果物を栽培、近くの街に直接販売する)を開発しなくてはならない。手工業においても農業と同じく、製造に要する技術は誰でも容易に習得できるということを忘れてはならない。

各人が必要なことを習得しさえすれば労働は短時間のシフトで済む。理想的には工場、家の中、あるいは畑で、一日四時間程度の労働が望ましい。コミュニティに可能な工業は、家具作り、組立式家屋の建造、印刷、出版、映画製作、陶器、皮製品製造など、などである。仕事はコミュニティが行って満足すべき種類のものであり、願わくば街中の中継所とも関連できるものでありたい。多分、大学キャンパスや近所の人に製品を売ることによってコミュニティやその運動についての会話の糸口となることもある。

(V) 内部組織

内部組織に関して起こるいくつかの問題がある。これら内部の問題についてより広く討論され、理解されればされるほど、集団は安定したものとなる。その目的のためにここでリーダーシップ、規律、新メンバー、子供の養育、それに女性の解放について扱いたい。

リーダーシップ

リーダーは有機的に、というよりは感情的、また理性的な帰結としてグループの中より決まる

ものである。強権的なりリーダーと自然的なりリーダーの間には重要な相違がある。強権的なりリーダーは各人の生活に力をもつ階層（ヒエラルキー）上の位置に、あるいは彼自身がグループを説得する手腕に、権威のよりどころを求める。初対面のグループにおいて、リーダーになりそうな者によってユーモアが用いられ、彼に反対する者が多少馬鹿げてみえるようしむけられることがある。一方自然的リーダーは、共に生活することから彼をよく知るメンバーの信頼をかちとるが、かれらは彼に服従はしない。私の経験では、自然的リーダーはしなくてはならないことをもつとも進んで、また熱心にするものである。しかしリーダーは、他のものが彼の尽力に依存するほどに仕事を引き受けるべきではない。真のリーダーは他人の潜在的リーダーシップを引き出すようにし、彼の必要をなくしていく。

規律

階層社会の規律は刑罰である。このような状態の下での人びとは運命の先導者であるよりは犠牲者である。しかし、すべてのメンバーが平等な決定権を持つコミュニティにおいては、規律は仕事を遂行するために自分たちを編成する方法となる。つ

と、ぼくらはまごつく。しかし真実ぼくらは来たるべき年月、今までしたよりもっと、もっと激しく働き、学ばねばならない。というのぼくらの道はクスリのトリップとは違って、組織を通じての、新しい組織を作ることを通じての長い道行きだからである。

新メンバー

いくつかのアメリカコミュニティ

ティールは新メンバーについて完全な開放政策をとっていた。どの場合も、それが没落の大きな理由になった。この種の実験は、しばしばコミュニティの住人、住人のめざすことに何の関心も持たない、ただめし食い、ヘソ曲り、押しかけ組を引き寄せた。もしコミュニティが、それらの人びとに何らかの影響をおよぼし、熱心なコミュニティ志願者になつてもらうことに生きがいを見出すのなら結構なことである。しかし、今までの事例からいうと、その更生には時間と努力がいり、コミュニティ自体の機能を破壊してしまうことが多い。実際には、それらの押しかけ組がコミュニティを変えてしまふ方が、その逆よりもはるかに多い。

だからといってそのことが、現在のメンバーの複写のような人間しかコミュニティに

は入れない、ということにはならない。とてもない。同類のみを入れることは、同じようにコミュニティを転覆させる要素である。矮少な均質性を生むからである。新メンバーはぼくらの生き方、目的にいったん同意できなくてはならない。それはかれらの生活をもつてぼくらのことを理解し、共に語る事を意味する。これは重要である。

新メンバー選出の適当な方法は、キブツが完成させた方法のゆるやかな適用である。メンバー志願者はメンバーと同じように約三ヶ月の間、コミュニティで生活し働く。いろいろな場面で彼を知るに十分な時間があり、彼にとつてはコミュニティの住人や生活のしかたになじむのに充分である。この相互の親しみの期間に志願者との間に話し合いの会を開き、相互にいろいろ訊ねあうのもいいかもしれない。このようにして、みなが理解し満足する形でまさに生活上の問題が扱われるだろう。多分、これはきつく思える。ぼくらのめざす根源的なコミュニティは有機的な統一であり、新しい兄弟、姉妹を選ぶのに注意しすぎることはない。（共に一生を形成しようとはしない過渡的な、便宜的なグループにあってはこんなことは不要であろう。）

まり、みなが同程度に打ちこんでいるとしたら、規律は目標めざしてどのように自身を組織していくかの問題となる。そしてこれはグループの大きさと親密さによって大きく左右される。簡単な規律構造は「努力期間」——この期間グループはどれだけのことをやってしまいたいと決め、各メンバーは恣意的に何々のことをすると決める——に見られよう。

グループの責任所在（規律）は輪っただだ。この二極に照らして煮つめられる必要がある。輪っこの型は多分に政治的であり、ぼくらの運動のかじとり屋である。そのために運動の問題を構造面、プログラムの側面から見る。他方だだっこの型はぼくらの運動の芸術家である。心霊術、神秘主義、種々学派の心理学に通じ、そのためコミュニティの問題を、人びとがよりやさしく、解放的になるといった、心理葛藤の側面より見る。どちらの見方も他方にこうけんするところが大きい。

規律が特に問題となるのは、規律が刑罰かあるいは他人に利用されるための方法であるような、権威的な家族、学校の硬性性にぼくらが個人的に反発したからに他ならない。ここにいたって、ぼくらの内の社会的残存物からさらに自由になるために自律が要求される

子供の養育と女性解放

コミュニティのメンバーたちを

ン粉にたとえるなら、子供たちはグループ生活のパン種、芳香である。パン粉が清ければつまり、新コミュニティで男女がつつみかくしなく互に反応し、愛し合うなら、女性が血洗い、子供の飼育係のカーストにおとめられていないなら、コミュニティの十全な生活に子供は欠くことのできないものである。ウーマンリブ運動は、人間関係の調和と、いわゆるラジカルな政治的課題との結合の必要を最初に強く表明した運動である。信頼関係にあるコミュニティでは、各人の成長と行動は、他人の感情、献身への配慮・反応にかかわっている。ぼくらの姉妹たちが公式、非公式に感じ、言うことを無駄に聞きすこし見過ごすことはできない。女性が第二級住人としてあつかわれ、料理人、子守り、かざり人形の位置にすえおかれてはならない。これは女性とともに男性の生活の再構成でもある。子供たちに食事させ、あと片づけするのは女性とともに男性の仕事でもある。男女が仕事を分けあう子供の共同養育では、男性のいわゆる「現実的」な、ひとと状況にどう対処す

るかの見方がやわらげられる一方、女性の自律性が要求され、視野が広がる。

信頼と責任分担のコミュニティ形成を通じてのみ、女性（男性）は解放されるし、真のコミュニティは達成される。コミュニティ抜きの女性解放は、身体を求める魂のようなものであり、女性の自由でないコミュニティは、魂のない身体のようなものである。

(VI) コミュニティーの幻

家族であろうが、友人グループ、あるいはコミュニティであろうが、人が一緒に住むときに、他人の表面的な感じ方、特異性に自分を含ませ、それが越えてはならない境界であるかのようにふるまうのはよくみることである。他人の邪魔をしないことから深い関係の生まれることがある。しかし、本当に他人を知り、彼の一部となるのは、彼の苦痛、喜びを自分のものとして感じることである。

メンバーが心理的にグループに寄りかかるとき、コミュニティは否定的な面を露呈することになる。一緒にいること自体、目的となるとき、あるいは、もしも一人、二人のメンバーが何かに参加しないと言うとしたら、

危機が感じられるようなとき、破壊的な依存関係がはびこっていると知られる。集団は中の人間をとき放つものでなくてはならず、それは各人がお互いの恐れ、弱点、強味を知られることを許容するところでのみ可能となる。自分が他人に知られ、他人を理解することに、他人によりかかったあなた任せでなく、まさに自分自身である事の強みから決然と行なうことができるであろう。逆説ではあるが、各人はグループよりも強くあらねばならないが、終局的な力と方向はグループから汲みとらねばならない。

いくつかのいわゆる「ヒッピー・コミュニティ」がコミュニティの去勢された型を示している。多くの時間が一緒にいることに、音楽を聞くことに、酔うことに、すわりこんでいることだけに使われている。こうしたコミュニティの最終的なルールはやさしき、互のふれあいであり、一般的にだれかのねらっていることには手を出さないおきてがある。それは子宮の中やすらぎ、肌ざわりへの退行である。個人にとって補助たるべき集団が、個人の生気や独立心をむしばむとしたら、これは深刻な問題である。集団体験は可能性を伸ばしこそすれ、抑圧してはならない。

別の幻のコミュニティは、お互いに本当によく知り合わないうちに一緒に暮らしはじめるところにおこる。互に衝突しはじめるやその緊張を発散するために相互防衛のメカニズムが発達する。——連発されるジョーク、同じ経験の回想、きまり文句、問題のすりかえ、常とう句……ほくらは禁止に、欲望、恐れを操作した両親、教師との闘争に傷ついている。かれらが知らずにそうしたもの、もとはといえば、無感動で、自身を知ること

を恐れているからである。ほとんどの人は人に知られ、自分を知ることが恐れている。自身の不安や弱点と対面する苦痛や、対面した結果自身が変らざるをえないことを恐れるためである。

しかし真のコミュニティにおいては、今やっている仕事に力強く、やさしくはげむ新しい男女を生み出すことが意図である。そしてそれは、心を開き、受け入れ、すすんで他に学ぶことからしか実現できない。繊細で注意深く、寛容で変わることを恐れない者だけが今までの禁止と防衛の半獄から抜け出すことができる。——ちようとかしのかたい実から芽生えた苗木が、実の養分を吸収し、若木となって成長するように……。

特集・コミュニティの基礎

私のコミュニティ経験

ドン・ミラー

筆者は現在京都在住。日本語と英語の新聞を作るために準備中。アメリカでのコミュニティ生活の長い経験を持つ。彼の新聞への協力者、あるいは情報提供者などを求めている。彼自身も自分の経験が、日本で始めようと思っている人たち、問題にぶつかった人たちの助けになるように、個人的協力を惜しまないと言っている。



ほぼ最初の移民がアメリカにたどりついたときからアメリカにコミュニティはあった。多くの国籍や宗教を持つ人びとのグループが経済的、保身的な理由のため一緒に生活した。しかし、アメリカのフロンティアが拡大され

資本主義経済の発展にともなって、人びとは分かればじめ、個人的に、また家族ごと生活するようになった。（もちろん最初のアメリカ人たち——アメリカ・インディアン——はいつも部族の中で生活した。だれもが兄弟、姉妹の生きることを助け合いながら。）

一九世紀になってふたたび多くの人びとは集団生活にもどる手だてを考えはじめた。実際ニューイングランドではひとりの男が「自由恋愛」コミュニティ——そこでは誰も結婚することは許されず、長い期間にわたって一人の相手とだけ暮らすことすらも許されなかった。——のために多くの人を集めた。（注・ジョン・ハンフリー・ノイエスのはじめた、オネイダ共同体のことを指すと思われる。「月刊キプツ」71年10・11月号P29参照）もうひ

とつ、宗教的、平和主義的原理にもとづいて創立されたクエーカーの集団は、今日では分散しているがいまだに存在する。

しかし、実際には「運動」も、「コミュニティ的人間」もいなかった。それぞれの集団は別べつに、自分なりの、また直接の環境に応じて動作していたにすぎなかった。しばしば、まったく外の人びとから孤立して。

今でもアメリカでは同様のことが言える。全土に数百のコミュニティが存在しているにもかかわらず、ごく少しのものがお互いに連絡をもっているにすぎず、いろいろなやり方においてことなっている。

●カリフォルニアには「ホイーラーズ・ランチ」があり、誰でも望むものに開かれている。百かそれ以上の数にのぼる、ひとつひとつユニークな小屋が散在している。組織や共同計画もほとんどない。非常に移動の激しい場所である。人びとは常に出たり入ったりしている。

●ニューイングランドには六家族か七家族で

農地を買い、とりあえず二軒の家に住んでいく人びとがいる。かれらはしばしば「外で」働く——大学で教えたり、建築現場で働いたり、果物の摘みとりをしたり、造園作業に従事したりする。一方そのあいだは他の人びとが本拠のコミュニティで牛、山羊、鶏の世話、野菜畑の手入れ、(冬期には)カエデ・シロップ作りをしている。子供たちはその近くの家庭が維持している「自由学校」に通っている。

●ジョージア州ニューアトランタ付近では、一九五〇年代にひとつのコミュニティが発足し、その人びとの教育活動に参加したり、地域の統合を助けることに努めた。小さなグループが一年中そこに生活していて、そこにさまざまな人びとが来て最低限の生活だけ保証されてプロジェクトに参加して働いている。

●ニューメキシコ州のとある町に自然食レストランがあり、それは町から少し離れたところにあるコミュニティが所有、経営している。そのメンバーは全員、そこに住んではいないインディアンの教師の教えに従っている。自給自足のために食物の栽培をはじめた。食事は

厳密に菜食であり、生活の中にさまざまな宗教的意味を持った儀式や儀礼がとり入れられている。

●デトロイトには大きな家にある集団が住み、政治的な問題にコミットしている。最近市議会選挙に候補者を送りこみ成功している。デモやコンサートを主催したり、「フリーク(意識的な脱落者)」コミュニティに向けて新聞を発行している。

以上のほかにも多くの例がある。ほとんどのコミュニティは他について知らず、自分たちの存続と内部関係にかかわっている。しかし、最近では何人かの人たちが雑誌などを発行して、お互いに注意を向け合うようになり、使用価値のある知識を分け合うとか、個人的に連絡をとりあうように努力している。問題は同じような傾向にあるので、このような意見をたたかわすことは新しいコミュニティにとって非常に有益である。

以下の観察は、訪問したり、学んだり、コミュニティで生活した経験にもとづいたもので

ちは、それだけのたくわえでは冬を越せないことを知り、その他のたくわえに頼らねばならなかった。(もつとよく準備計画していたら使わなくてもよかった金である。)

ひととはときにはひとり静かに離れている必要を感じる。ひととき孤独でいられる場所を持たないコミュニティは、内部の緊張と騒乱のひどさに苦しんだ。一軒家の中で共同生活は、家族(通例個人にとつても)が長期間住むのは不可能に近い。別々な家、共同の仕事計画、安定した毎日の生活の方がはるかにスムーズにゆくと思われる。

多くのコミュニティが多すぎる訪問者(特に夏休み中の学生)のために壊された。かれらは来て、取るだけで、お返しに何か与えることはほとんどなかった。現在ほとんどの場所では訪問の時間が限られているとか、金を要求するとか、親しい友人以外は来訪することを禁じるかしている。

コミュニティが危機を生きのびるチャンスは内部の人びとのつながりいかんによって左右される。もしもかれらが「大地に帰り」たい

ある。

共同生活は各個バラバラの生活よりきついものである。しかし、苦しみも多いたく、通常報われる度合も大きいものである。ときどき、ものごとを決めたり、したりするのに個人でやった方がはるかに速く、効率的にできるのではないかと思われるほど、多くの時間をとられることがある。その他の時には、共同で働くことによりおおいに時間が短縮されることがある。(たとえば農作業とか家造り)共同生活ははるかに安上りにつく。大量買いで安くするし、個人的に買ったであろうもの(道具、農耕トラクター、家など)が共有できるからである。子供を持つ両親はより多くの自由で恵まれる。常に子供の世話をしてくれる人がまわりにいるし、遊び友だちになる子供のつれがいる。子供の教育は「自由学校」でできるし、多くの家族、コミュニティ同士そのことで協力しあえる。しかし、ときどきあまり多くの父、母がいるので子供たちがまごつくこともある。子供を共同で育てるにあたっては、コミュニティメンバーの間に相互の強い信頼のきずがなくてはならない。

ためとか、好奇心から一緒に暮らしているとしたら、それはつかのまの合一にすぎない。そして、もしも一緒にいる理由が同一の目的とか、ある人物ないしは思想に対する忠信だとしたら、それらの理想像がメンバーにとつて最も重要なものである間だけつづくにすぎない。個人間の愛情すらも、ときによってはコミュニティを分解から救うのに十分ではない。感覚的なきずはさまざまなことで打ち破られやすいのだ。



しかしながら、これらすべての型のコミュニティは、内部の人間の変化にともなって変わっていく。共通の目的、お互いの間の愛、同じような生活様式、そして(最も重要なこと)みんなが分けもつ精神的雰囲気があるとき、その集団は人間関係の問題や危機を乗り越えることができるであろう。かれらのつながりは一時的なものではなく、感情に左右されず、このことから物事を見透す力を得る。現在の破壊的、利己的な周囲の世界に代わるものを示すのは、実はこのようなコミュニティなのではあるまいか。

地元の「外」の人びとと良いつながりを保とうと努力するコミュニティは、必ずそのつながりから恩恵をこおむると言える。コミュニティといわゆる「頭の古い連中」の衝突の問題は、最初のころにかれらを怒らせなかったならば決して起こらなかつただろう。そのうえそこに住む人びとは、そこでの長い経験にもとづき、あるいは代々伝えられた知識や知恵にもとづいて、生きるうえに非常に価値あるものを提供してくれる場合が多い。苦勞の多いとき良い隣人は天の恵みであり、多くの集団が厳しい時期を地元の人びとのおかげで乗り切ることができた。

共同生活の形をあせらなかつた人びとは、「頭からとびこんだ」ものたちよりも、問題のありか、必要なことについて良く準備できていた。のちになって時間の浪費になったり、悔いを残したりするよりは、家を建てる前にいくらでも学んでおくことはある。多くのコミュニティが、単純に家のつくりが気候に、必要に合わなかつたとか、生活が快適でないという理由によって失敗している。

食物についても同様である。入殖して一年目ですでに自給できると予定していたものた